

大学時代の実践的カリキュラムがその後の社会生活 に与える影響

——野外スポーツコース専門実習履修者の事例——

柴田さやか⁽¹⁾ 黒澤 毅⁽²⁾

調査の背景

現在、少子化傾向が進み、大学入学者減少や大学間における学生獲得競争など、大学を取り巻く現状は厳しいものとなっている。大学側は特色あるカリキュラムで入学者を確保し、学生を社会に通用する人材を育成しなければならない。

本学は「わが国の閉鎖的な体育指向から脱却した、国際的に通用する新しい日本のスポーツ文化の創造」を理念とする、日本で唯一「スポーツ」の名を冠する大学である。その、大学の特色である「高度な専門知識」と「実践的な技能」を備えるために、様々な実践的カリキュラムが組まれている。その中でも特徴的であるのは、野外スポーツに関連した内容のものが豊富にあることで、一年次には野外スポーツの三つの実習がある。専門のコースに分かれてからも、学びを深めるために専門実習やインターンシップ実習などの特色あるカリキュラムを取り入れている。

そこで、本研究では野外スポーツコースを卒業した者を対象に、コース専門科目として実施された野外スポーツコース専門実

習について、その経験が現在の自分にどのように影響し、社会生活を送る上で役立っているのかを明らかにし、今後のカリキュラム検討のための基礎資料になることを目的とする。

調査方法

1) 日 時

2009年11月26日にアンケートを送付し、回収期日2009年12月4日までに投函することとした。

2) 方 法

郵送法を用いて実施、回答後に返信用封筒にて回収を行った。

3) 対 象 者

びわこ成蹊スポーツ大学 生涯スポーツ学部 生涯スポーツ学科 野外スポーツコース卒業生50人に郵送し、返信のあった男子16名・女子12名の計28名を対象とした。回収率は56%であった。

4) 調査用紙

実践的カリキュラムである専門実習について、どのように影響したのか、または今後すると思うか、その他大学時代の経

(1) スポーツ開発・支援センター研修生

(2) びわこ成蹊スポーツ大学

験に関する内容の質問を行った。回答については、「とても〇〇している」から「まったく〇〇していない」までの5段階の回答方式で、その後理由を問う自由記述式の欄を設け、著者が独自に調査用紙を作成した。

結果及び考察

「夏の専門実習は思い出に残っていますか」の問いに対する結果を図1に表した。20名(71.4%)が「とても残っている」と回答した。「残っている」と回答した6名(21.4%)と合わせると26名(92.8%)が夏の専門実習はなんらかの形で思い出に残っているということが明らかとなった。

また、「残っている」・「とても残っている」と回答した26名に対し、「特に心に残っているプログラムは何ですか」の問いに関する結果を図2に表した。最も多かったのは10名(38.5%)が「登山」と回答した。その理由として、「仲間に支えられている自分」「仲間の優しさを感じた」「達成感があった」と答えている。

苦手意識や不安な状況があるなか、今まで経験したことのない重い荷物を持ち始まる専門実習、まだ仲間との関係が濃くなっていない状況が、登山をすることで仲間と行動する楽しさ、仲間の大切さを感じ、やり遂げた達成感や頂上で見る景色、自然は特別な印象となり思い出になっているようである。

また、仲間意識を強めた要因として、縦走登山のプログラム中に行われるソロ活動

があげられ、3名(11.5%)が「ソロ活動」と回答している。登山と回答した10名の中にもソロ活動に関して述べている内容もあり、ソロ活動は、個人別の活動であるものの、その経験がその後の仲間との活動において重要なものとして位置づいた。山の中で周囲に誰もいない状況で時間を知らせる機器類を持たず、寝床作りから炊飯まで全てを一人で行い、自分自身を見つめることの出来るプログラムについて、浦田⁴⁾は次のように述べている。「ソロビークという、一人で自然に包まれるという非日常的体験を通して、自然の様々な事象に自ら気づくことで、様々な価値観を持つことができたからではないかと思われる。そしてそれらが自分にとって意味のあるものとして受け止められ、日常生活の中に受け入れられていったことを示しているものと考えられる。一人になり、自ら気づくということが、単に一過性の体験としてではなく、日常生活の行動や意識につなげていく可能性を持っていくものと思われる。」

回答の中にも、「今後なかなか経験することが出来ないような活動であった」「仲間と活動する状況から一人になることで、自分がいかに人に頼っていたのか」そして、「仲間の存在や仲間の重要性を強く感じた」と一人であることが、反対に仲間を意識させたという回答に繋がっていると考えられる。

ソロ活動は、非日常的体験の中において、一人で考える時間が、それまでの活動やこれからの活動・自然への気づき・仲間に対して様々な思いを持つことができ、自分に

とっての意味あるものと捉えることが出来ていることが伺え、大学生という社会に出る前の学生にとって意義あるプログラムの一つであると考ええる。

次に「ハイク」と回答した4名（15.4%）においては、「地図を確認して仲間と話し、40キロを歩くこともなかなか経験出来ない内容である」「登山での疲れの残る中、自分の体力の限界から、今まで活動をして築いた仲間に自身の弱い一面を全て見せることができ、更に仲間の重要性を再確認することが出来た」と答えている。

「登山」・「ハイク」で体力的・精神的に自身の限界に近い状況で活動を行うことは、仲間がいないと、諦めやリタイアに繋がってしまう。仲間が助け合うことで限界の状態でも乗り越えられる。「登山」や「ハイク」と回答した者の記述から、仲間の存在がとても重要であると考えられる。

「シーカヤック」と回答した5名（19.2%）においては、「自然の凄さや怖さを感じる事が出来た内容であった」と答えている。一年次に行く琵琶湖でのカヤックとは異なり、海の上で今まで経験したことのない高波を肌で感じて、自然を相手に活動を行うことは、楽しいが、一歩間違えれば危険が伴い大惨事を招く危険性も多い。色んな自然状況の変化に対応することで、自然に対する思いや考えが変化していくのではないだろうか。

夏の専門実習について「自分にとって重要でしたか」の問いに対する結果を図3に表した。22名（78.6%）が「とても重要であ

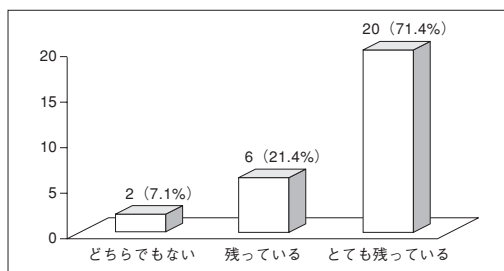


図1 夏の専門実習は思い出に残っていますか

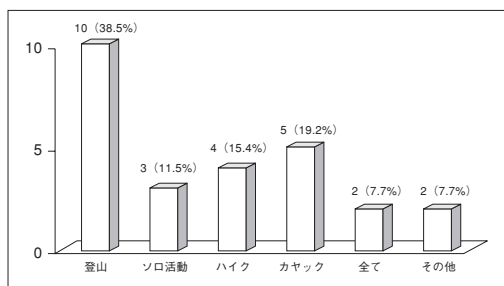


図2 特に心に残っているプログラムは何ですか

った」と回答した。「重要であった」と回答した4名（14.3%）と合わせると26名（92.9%）が重要であると捉えている。「自身に向きあうことが出来た」「成長にした」「自然の素晴らしさや怖さを知ることが出来た」また、「今後同じメンバー・状況ですることが出来ない」と回答した者もあり、その当時は重要だと捉えていなかった者も「卒業して専門実習の重要性がわかる」と答えている浦田⁴⁾はソロ活動について「2ヶ月後においてソロビバークの体験が肯定的に受け止められるようになったのは、実習全体の体験を通して、自分にとって価値あるものと感じ取れるようになったからではないかと思われる。」と述べている。回答にもあったように卒業して重要性がわかることも多く、専門実習における活動が後に自分にとって

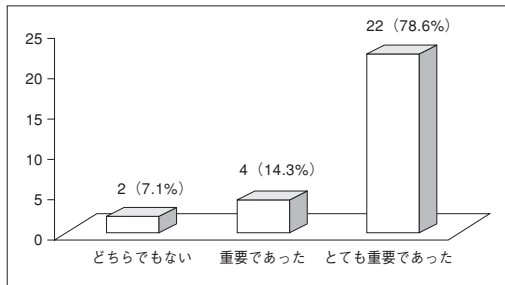


図3 自分にとって重要でしたか

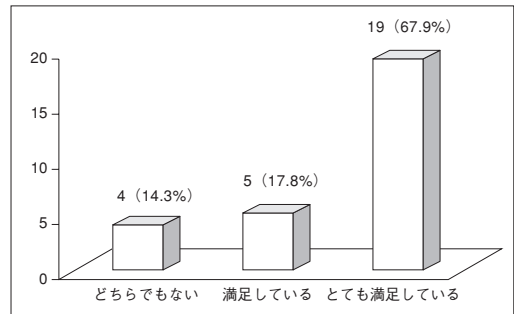


図4 満足した経験でしたか

価値のあるものだと感じ取れるようになったと考えられる。専門実習は、すぐに表れる効果と後の社会生活の中で表れる効果の両側面を持ち合わせた特色を持っている。

「満足した経験でしたか」の問いに対する結果を図4に表した。19名(67.9%)が「とても満足している」と回答した。「満足している」と回答した5名(17.8%)と合わせると24名(85.7%)が満足した経験であったと感じている。「やればできる」「自信がついた」「このような達成感は味わうことが出来ない」と答えている。伊原¹⁾は「冒険教育プログラムのねらいから考えると、プログラム前後での優れた向上よりむしろプログラム後の日常生活を含めた変容が期待される。」と述べている。冒険教育プログラムのプロセスモデルでは、学習者が自然環境から受ける影響や集団から受ける影響、身体的・精神的負荷など様々な葛藤や困難を経て成功・達成の経験を今後の向上に向けるとされている。このことから活動を行うことで気づきがあり、そこから自身の成長や他者との関わり、不適応な状態などを経て、様々な面での成長があり、後に満足した経験と捉えられたのではないだろうか。

「現在へ影響していますか」の問いに対する結果を図5に表した。8名(28.6%)が「大変影響している」と回答している。また、11名(39.3%)が「影響している」と回答している。理由として、「コミュニケーション能力がついたことが職場でも発揮出来る」「辛さが小さく感じる」「野外での活動の範囲が広がった」「野外の指導者として仲間や自然について子ども達に話が出来る」と答えている。

現在の就職先が野外スポーツ・教育関係の卒業生にとっては、大学時代の活動自体が子どもを指導する上で役に立っている。また、野外スポーツ・教育関係とはまったく関係のない職種の場合でも、コミュニケーション能力や仲間を大切にする気持ち、やれば出来るという気持ちの面で影響している。大槻²⁾は「《野外活動の効果》として【人とのつながり】や【自然への気づき】が普段の生活よりも感じる事ができる事がわかる。そして自然が独自に作り出す環境によって、【自分と他人の成長】を認識することができ、そこで自分の世界を広げるきっかけとなるようだ。それらが《自己成長の自覚》となって、様々な方面での可能性

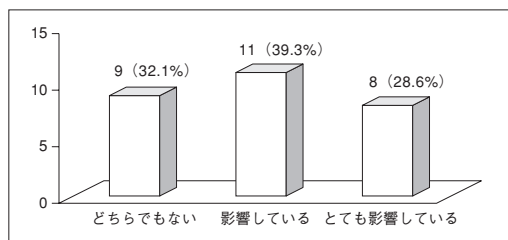


図5 現在に影響していますか

を、自己が感じ取っていることが明らかとなった。」と述べている。人とのつながり・自然への気づき・自分と他人の成長の要素を多く含む専門実習での経験が、19名(67.9%)と大半の卒業生が仕事や私生活に専門実習の経験が影響していると答えた背景にあると考える。

「将来へ影響すると思いますか」の問いに対する結果を図6に表した。9名(32.1%)が「とても影響する」と思う。10名(35.7%)が「影響すると思う」と回答した。「辛いことがあったとき対応出来る強さ」「個人的に活動するきっかけとなった」「また辛い体験を乗り越えたことがこれからの支えとなり続ける」と答えている。大概²⁾は「野外スポーツコース専攻の学生は野外活動体験を通し、自己・他者・自然と共存することで自己の成長を自覚し、野外活動の経験を土台に将来への可能性を広げている」と述べている。野外活動体験を経験したことが自身の土台となり、その先に辛いことがあっても実習を乗り越えた自信を支えとし、将来に繋げていくのではないだろうか。

「その他の活動で思い出に残っていますか」の問いに対する結果を図7に表した。18名(64.3%)が「とても残っている」と回

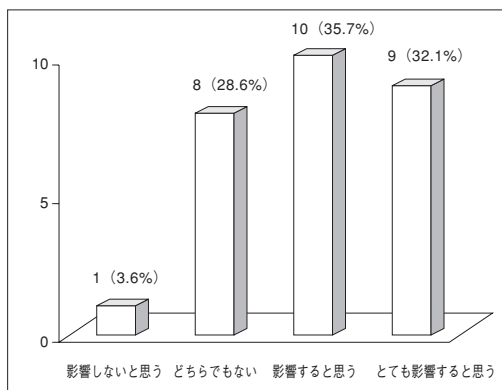


図6 将来に影響すると思いますか

答した。「残っている」と回答した7名(25%)と合わせると25名(89.3%)が残っていることが明らかになった。冬の専門実習や卒業論文、新入生キャンプ・インターンシップ実習などの授業、個人の意思による活動である部活やゼミの活動が思い出に残っていた。授業に関しては、「教科書やプリントだけの講義では資料を残しておかなければ忘れてしまう内容であるのに対して、ゲームの立案、実施・クラフト、ネイチャーゲームなど体を使って実践的に行う講義が記憶に残っている」と回答している。竹内³⁾は「自然環境下において、自己の葛藤や他者からの刺激、環境変化による困難や楽しさなどの中で相互に関係し合い、適応・不適応を繰り返しながら課題を克服し、達成感と今後の意欲へ変化していることがわかった。」と述べている。在学中に自分自身が重要と捉えて行っていた部活やゼミ活動・専門的な授業・実習において適用・不適応を繰り返しながら課題を克服することは達成感や今後の意欲に繋がり、現在の仕事や生活に影響しているのであろう。

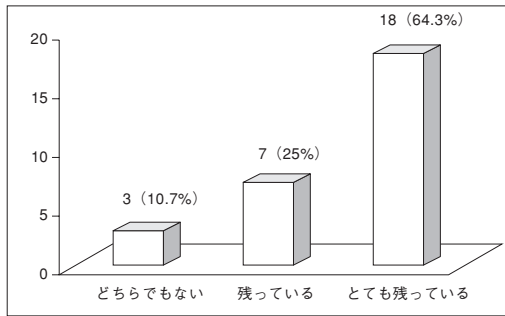


図7 その他の活動で思い出に残っていますか

まとめ

本研究では、実践的カリキュラムが現在、将来にどのように影響するのかを明らかにすることを目的に野外スポーツコース卒業者を対象に「専門実習について」「どのように現在・将来へ影響があるか」などの質問項目からなる調査を実施した。その結果以下のことが明らかになった。

専門実習は野外活動で学ぶ、自己の成長・他者とのつながり・自然に対する考えを短期間で集中的に感じる事が出来る実習である。実習中に表れる効果、もしくは後に表れる効果の両面性を持っており、実習中に身に付けた技術や抱いた感情、後に表れる効果が現在の仕事や生活に影響を与えていることがわかる。また、野外活動の経験を元に大学で積極的に行っていた活動や学びは、野外に関する分野だけでなく様々な分野で発揮される。

今後の課題

- 1) 夏の専門実習に対して回答を得たため、今後、冬の専門実習やその他の実

践的カリキュラムにおいても明らかにする必要がある。

- 2) 野外スポーツコースのみ調査を実施したため、今後他のコースでの実践的カリキュラムが社会生活へ与える影響を明らかにする必要がある。

引用文献

- 1) 伊原 久美子 (2004)：「冒険教育プログラムが小中学生の一般性セルフエフィカシーに及ぼす影響」野外教育研究第7巻第2号 p13-22
- 2) 大槻 健太 (2006)：「野外スポーツコース専攻学生の自己の語りの特徴～体験が及ぼす影響に着目して～」びわこ成蹊スポーツ大学卒業論文
- 3) 竹内 啓 (2007)：「冒険教育プログラムに参加した大学生の達成動機の変容～実習参加学生の語りから～」びわこ成蹊スポーツ大学卒業論文
- 4) 浦田 憲二 (1999)：「ソロビパークにおける自然への気づきについて (その2)～2ヶ月後にみられる影響について～」日本環境教育学会第10回大会研究発表要旨集 p 116